

伝えたい思いをわかりやすい授業へ

理学教室 准教授 小林礼人



12月15日945講義室で、FD委員会主催の第1回教員キャリアアッププログラムが開催された。「伝えたい思いをわかりやすい授業へ」をテーマに、小林礼人准教授（理学教室）が実践事例を紹介した。

それぞれの専門分野において、学生たちに伝えていきたい内容は膨大かつ多岐にわたるものと思われる。中身が充実してこそ講義が成り立つのももちろんであるが、1学期間で伝えられることには限りがある。多くを盛り込みたいがためにかえって縁遠いものになってしまったのでは、せっかくの熱意も空回りしてしまうかもしれない。伝えたい思いをわかりやすい授業へ。浅い教歴の中での実践事例を紹介する。

ストーリー性のある授業を

専門分野の学術的な内容については、各人が十分に理解し、把握しておられることであろう。しかし、90分間の講義が15週にわたって開かれるとしても、そこで扱うことができる内容は、学問分野全体から見てごく限られたものである。学生たちに発する情報量が多すぎても、初めて学ぶものにとっては敷居が高くなってしまいかねない。難解な用語や表現は避け、15週で完結するストーリーを再構成して講義に臨むことも必要であろう。

講義室のチェックも

各講義室の座席数は、大学ホームページの学内コンテンツとして提供さ



説明する小林准教授

れている。しかし、座席数が同程度でも黒板のサイズは異なる場合もあり、スクリーンの位置などは講義室へ行ってみなければ情報が得られない。そのため、学期が始まる前には割り当てられた講義室の下見をお勧めしたい。そして、さまざまな大きさに黒板に文字を書き、講義室の後ろの方から自身が書いた文字を見て、適切な文字の大きさもお考えいただくと良いであろう。また、縦書きであれば問題はないが、横書きの場合には多少の工夫が必要である。すなわち、黒板そのものは横長のつくりなので、どこかで区切らなければ1行が長くなってしまふからである。もちろん、講義の途中で現れたキーワードだけを斜めに走り書きして、学生が板書に気づいたところに消してしまうのでは、黒板の活用とはいえないことであろう。

スライドの説明ではなく

数式や画像などを含んだスライドの作成が可能となり、今日では授業において広く用いられている。一方で、情報量が多すぎないか、授業についていくのが困難でないかなど、受講者の視点で検証すべき課題もあるものと思われる。1枚のスライドに何行にもわたって初めて目にする専門用語が並んでいたとすると、学生たちはどう感じるであろうか。学会発表などでは、準備したプレゼンテーション資料を聴衆おかまひなしで一方的に説明するケースが散見される。教える側と教えられる側の双方向性を高める観点からも、スライドはあくまで補助であって、教員が受講者を意識しつつ授業を進めることが求められるのではないだろう

か。また、プロジェクトを用いた授業では、ともすると専門用語とその説明に終始しかねない。論理的文章になじみがない昨今の学生たちには、まず論理的文章を読ませる工夫も必要であろう。スライドの内容をプリントにして配布する際、空欄を残した「穴埋め式」にしておられる方も多いと思われるが、文章を書く習慣がつくような配慮もなされるべきものと思われる。

ゆっくり、はっきり、くり返し

講義は中身が重要である。しかし、受講者に伝わらないのでは何にもならない。十分に練った講義内容を「ゆっくり、はっきり、くり返し」語る事が不可欠であろう。日本語は文の終わりでYesかNoかが決まるので、文の終わりを特にはっきり話す必要がある。留学生に語りかけるときには、とりわけ注意すべきことと思われる。また、よく似た発音の単語を区別するためにも、子音に時間をかけてはっきり話すことが大切である。同音異義語は口頭のみでは区別が付かないので、板書やスライドなどと組み合わせて伝えることが有効であろう。聞き逃してほしくないキーワードには、前後に時間的すき間をとって際立たせるのも一案である。もちろん聞かせたいのは学生たちであるから、学生とアイ・コンタクトをとりつつ話すのが良いと考えられる。それも一番後ろの席に座っている学生に語りかけようとするれば、伝えたい内容が講義室全体に届くものと思われる。

おわりに

伝えたい思いをきちんと伝えるための術を身に付けておくことは、講義を行うものとして重要なことである。テクニックに加え、学生たちとともに講義を楽しむような姿勢が伴えば、更なるキャリア・アップにつながるものと期待される。